

2012年にベネッセ次世代育成研究所が実施した「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(\*)では、人の話を最後まで聞く、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力がその後の「学びに向かう力」の土台になることが明らかになりました。「学びに向かう力」を、幼児期にどう育むかを考えます。\*詳しくは2013年春号をご覧ください。

## 第1回 「人の話を最後まで聞く力」を育む

### イラストで見る! 「人の話を最後まで聞く力」が育まれた状態とは?

Aちゃん  
5歳・冬〜春

12月に行われた餅つきでのことです。前日の帰りの会で、Aちゃんのクラスの担任は「明日の餅つきのごとで、先生から大切なお願いがあります。明日は、お箸を家から持ってきてください」と言いました。ところが、帰りたくて夢中になっていたAちゃんは、すっかり先生の話聞き

らしてしまっただけです。餅つき当日、うれしそうに自分の箸を見せ合う友だちを見て、自分の箸を持って来るのを忘れたことに気がついたAちゃんは、担任に話し、園の箸を借りることに。自分の箸を持ってこられず、少し寂しい気持ちになったのでした。

そして3月。お別れ遠足の前日のことです。帰りの会で先生がこう切り出しました。「今から明日の遠足のごとで、大切なお話をします」。

楽しみにしている遠足のごとであれば聞き逃すわけにはいかないと、Aちゃんは先生に注目。先生は「おたよりに、おしぼりを持ってきてほしいと書くのを忘れたので、おうちの人に伝えてほしい」と言いました。



Aちゃんは、今度は忘れないようにしようと思いました。そして家に帰るとすぐに、お母さんに「明日、おしぼりを持って行かなくちゃいけないんだよ!」と伝えました。

先生のお話をしっかり聞いたので、クラス全員がおしぼりを持ってきました。公園でお弁当を食べながら先生は「今日はみんなおしぼりを持ってきたんだね。先生のお話をちゃんと聞けるなんて、さすが年長さんだね」とクラスのみんなをほめました。



お箸を忘れたときはとても寂しかったの。だから今度は、ちゃんと先生のお話を聞かなくちゃ! って思ったんだよ



## 聞いた内容を理解し、行動に結びつける力

「人の話を最後まで聞く力」というと、行儀良く静かに聞く様子をイメージするかもしれませんが、必ずしもそうではありません。「人の話を最後まで聞く力」は、①最後まで聞く、②話の内容や相手の気持ちを理解する、③そのうえで自分がどう行動したらよいかわかる という3つの要素で成立するものです。静かに聞いているだけでは理解しているとは言えず、行動(事例で言えば、おしぼりを忘れずに持ってくる)まで結びついて、初めて「人の話を最後まで聞いた」と言えるのではないのでしょうか。

子ども自身が「人の話を最後まで聞く力」の重要性に気づくのは5歳頃からです。なぜなら、聞かずに困った事態が起きたときに「これからはちゃんと話を聞こう」と意識できるようになるからです。4歳頃までは、たとえ話を聞かなくて困った状況に陥っても「自分が聞かなかったから失敗した」という意識はまだもてないことがあります。

### ●「人の話を最後まで聞く力」が育つのに必要な経験

- 0〜2歳：周囲との信頼関係の基盤づくりの時期。自分の発する言葉を大人が繰り返し言うことで、気持ちをくみ取ってもらったうれしさを知る。
- 3歳：人と言葉を交わす心地よい経験を積む時期。自分が言ったことや気持ちを受け止めてもらえたうれしさ、自分に語りかけてもらえる安心感を体験する。
- 4歳：集団の中の一員として、全体に向けた話が聞けるようになる時期。担任がクラス全員に語りかけているときも、「自分も聞かなければ」ということが少しずつわかり始める。また、数人の遊び仲間言葉が伝わったうれしさも感じるようになる。
- 5歳：静かにしゃべらずに聞くことが大事だとわかってくる時期。担任の話聞きもらした失敗を経験して、「先生の話は自分にとって大事だから聞こう」と自覚が芽生えてくる。仲間どうしで考えや思いが伝わったうれしさを体験する。



## 聞いてよかった、聞けばよかった場面をつくる

5歳頃からは、保育者は子どもが話をしっかり聞いて理解し、行動できたことをほめ、確認することが大切になります。また、聞けなかったから困ったという状況を意図的につくることも大切です。前ページのように子どもが話を聞かないことであとで困ってしまう状況をつくることも一案です。もちろん、聞きもらしてしまう子どもはいますから、失敗しても園でフォローできるもの(お箸やおしぼりのように忘れても差し障りのないもの)で試みます。また、あらかじめ保護者に「子どもの成長のためにわざと失敗する場面をつくる」と伝えておけば、子どもの育ちに対する保護者の理解も深まります。

遠足の話をするよ」と言えば、子どもは大事な話だと判断し、耳を傾けます。「大切な話だけど聞けるかな?」と語りかけて、子どもの気持ちがこちらに向かったことを確認してから話し始める配慮も必要です。また、長々と話すのではなく、要点を的確に伝えることも重要です。

伝えたいことをどのように話せば、子どもに伝わるのか、子どもの気持ちになって自身の語りかけを振り返ってみるとよいでしょう。

